

2023年1月発行

CWS JAPAN NEWSLETTER NO. 76

いつもCWS Japanの活動に温かいご支援、
ご理解をいただき、ありがとうございます

本年も何卒宜しくお 願いたします

2023年を迎え、皆さまにおかれましては新春を清々しい気持ちでお迎えのこととお慶び申し上げます。昨年は多くのご支援・お力添えをいただき、誠にありがとうございました。争いや気象災害が絶えず、たくさんの方が生活基盤を失った年でした。

新年を迎えるにあたり、心を新たにCWS Japanの抱負をお伝えいたします。

- 世界各地で起きている人道危機に対し、国内外のパートナーシップをさらに強化し、より迅速で効果的な支援を模索し、実行してまいります。今まで以上のスピードや質の強化に努めます。
- 災害リスクを一人ひとりが軽減できるように、社会資本の強化、地域の人々による課題解決、災害のサイエンスの伝達により力を入れ、グローバルに資源を動員し事業化してまいります。
- リスク管理や給与体系などを更に見直し、チーム体制のさらなる強化を行いながら、NGOセクターが魅力ある職場として位置づけられるよう、弊団体でできることを積極的に実行してまいります。

個人的には、パートナーや同僚など、「他の人の成功のために一生懸命になる」ことを抱負としました。大義を見て利他的に動けると、変わらなかったことも変わっていくものだと思います。言うだけでなく、それを実践する年にしたいと思います。

OUR BLOG IS OPEN!

ニュースレターを**NOTE**でも
配信しています。

いつも多くの方にご覧頂
いているニュースレターをも
っと手軽に、どこでも読み
やすくしていきたいと思っ
ています。



写真

東日本大震災から約1週間後の釜石市内
(CWS 五十嵐撮影)

皆さまにとって、本年が、うさぎのように躍動・飛躍できる年となるよう、心より祈念しております。本年も何卒宜よろしく願いいたします。

小美野 剛 拝
CWS Japan 事務局長

インターンシップに参加して

昨年、10月よりインターンとして活動してまいりました。その活動の記録をご紹介します。

活動内容

インターンの最初は、職員の方に研修をしていただきました。CWS Japanのこれまでの取り組みや事業に加え、人道支援とは何か、そしてキャリアについてなど色々なお話を聞かせていただき、CWS Japanへの理解を深めると同時に、自分の将来についても考える良いきっかけになりました。

インターンの活動としては、主に学生に向けたインタビューを行ってきました。わたしは、CWS Japanが実施している大久保地区の多文化共生防災事業に向けて、地域の学生とのコネクションを深めたいと考えており、そのためにまずは学生が何に関心を持っているのか、またどのようなコミュニケーションツールを使っているのかをインタビュー形式で調査しました。インタビューは、留学生を含む大学生6名に実施し、興味のある社会課題や国際協力・NGOへの理解度、多文化共生に対する意見、SNSの使い方などを聞きました。

その他には、CWS米国本部職員の方との会議に参加させていただき、CWS米国本部の取り組みやアメリカと日本の課題の違いなどを学びました。

学んだこと

研修を通してわたしが最も学んだことは、支援者としての心構えです。印象に残っている言葉に「支援者と被支援者の間にはどうしてもパワーバランスが生まれる」があります。いくら支援者側が、被支援者側に寄り添い、

対等に接しようと思っても、パワーバランスは必ず存在することを理解して、責任のある行動をしなければならないのだと学びました。また、防災事業への興味・理解が深まりました。特に、災害大国である日本だからこそ培ってきた防災ノウハウがあり、それを他国での防災に役立てることができるというのは新たな視点でした。



写真
学生へのインタビュー調査結果の報告時の様子

学生へのインタビューを通しては、いくつもの発見がありました。

まず、予想していた通り、NGOや防災に対する興味は一般的に低いということが分かりました。国際協力に関しては興味のある学生もいるものの、国家主導で行っているイメージが強く、NGOが行っているイメージはあまりないようでした。このことから、まずはNGOの存在を認知してもらうことから始める必要があると感じました。また、学生の社会課題への興味は幅広く、それらを取り扱う大学での授業も多い一方で、座学ではないリアルな学びの場や学生が実際に行動し体験する機会が欲しいという声があがりました。特に、今の時代、就職活動時によく聞かれる「学生時代に頑張ったこと、学生時代に最も力を入れたこと（ガクチカ）」のために1・2年生のころから授業外での活動を考えている学生も多く、学生の主体的な活動の場へのニーズは高いと感じました。また、多文化共生に向けては、交流会や言語交換のような「日本人」×「外国人」ではなく、「人」同士としての交流が

必要ではないかという意見が複数ありました。アイスブレイクのような一度きりの交流ではなく、日本人も外国人も国籍を問わず一緒に何かをするという体験をすることでより継続的な関係が築けるのではないかと感じました。最後に、コミュニケーションツールについては、instagramやTwitterなど各種SNSの使い方の違いなどを確認しました。

今後の目標

今後は、CWS Japanと学生の継続的なコネクションを作るため、多文化共生防災事業促進に向けて、学生との協働プロジェクトを考えたいと思っています。CWS Japanから学生に何かを教えるというのではなく、学生が主体となって多文化共生に向き合うような機会を作りたいです。プロジェクトは、日本人学生だけでなく外国人学生も参加できるようにし、国籍関係なく一人の人として関係を築けるような場にしたいと思います。まずは、そのはじめの一步として、プロジェクトと一緒に進めてくれる学生を探るところからスタートしようと思います。

これからもインターンとして自分に何ができるのか考え、皆様に良いご報告ができるよう精進してまいります！
読んでいただきありがとうございます。

(文：インターン 三国萌恵)

「遠くの災害」「過去の災害」から学ぶ

今年の1月17日で、阪神・淡路大震災から28年になりました。そして、今年は関東大震災からちょうど100年目となります。

1995年1月17日・いつもと同じ

東京出身の私は当時高校生で、寝ぼけながら学校に行く準備をする側、朝のニュースで関西の方で大地震が発生したと聞きました。

「何だか大変そうだな」ぐらいしか思わず、いつも通り学校に行き、授業を受けました。昼休みになって、学校の近所の定食屋のテレビで阪神高速が横倒しになっている映像を観て、初めて事の深刻さに気がついて、胸がザワザワしたのを覚えています。

その後しばらくの間はテレビのニュースや特番を気に掛けていましたが、特に何か行動を起こす事もなく、いつも通りの高校生活が続いていきました。今思えば、当時の私は、災害にあまり関心がなかったようです。テレビの向こう側で大変なことが起こっていると思いつつ、どこか自分の生活とは離れた遠い出来事のように感じていたのかもしれない。

人道支援に携わる者になって

それから15年後の2010年1月、私は中米ハイチの首都ポルトープランスで、大地震で崩壊した瓦礫の前で被災者を支援していました。その約1年後の2011年3月には東北の津波被災地で、さらにその約5年後の2016年4月には熊本で、高校生の時はテレビの映像でしか観なかったような崩壊した建物に囲まれ、被災した方々の生の声を聞きました。その間も人道支援を職業としてから、国内外の様々な災害の現場に行き、被災した人々の声を聞き、支援活動に従事してきました。



写真

大きな被害を受けたそごう神戸店

(<https://www.asahi-net.or.jp/~LC1T-KYM/SMALL/haninbmp.htm>)

色々な災害現場に行って、被災した人々の話を聞くと「まさか、こんなことになるとは思わなかった」という話をよく耳にします。確かに直近の過去数十年は大きな地震が発生していなくても、何百年という単位で歴史を振り返ると、大きな地震の記録が残っている地域が、日本には多くあります。



写真

22万人以上が犠牲になったと言われる
2010年ハイチ大地震

©UN Photo/Marco Dormino

一方、近年の地球規模の気候変動の影響を受けて、予想を遥かに上回る速度で水害が発生する事例もあります。しかし、浸水予想地域のハザードマップはほとんどの自治体が持っており、事前の注意喚起を促す警戒や避難情報を出している事例も多くあります。つまり、あ程度は事前に災害を予想することができ、それに備えることも可能なのです。新たな災害現場に行き「まさか」という話を聞くと、その土地の過去の経験や他の地域の教訓が伝わっていないのかと考えてしまうことがあります。

災害を自分事として考える

しかし、私が高校生の時を振り返ると、阪神・淡路大震災を自分事のように捉えることはとてもできておらず、そこから教訓を学ぼうという気持ちには、まったくなくなっていたと思います。今になって関西出身の知人・友人から体験談を聞き、人道支援という職業に就いて、やっとある程度「近くのこと」として考えることができるようになりました。日常生活の範囲外で起こった災害は、自分からできるだけ積極的・自発的に耳を傾

"災害は自分の日常生活ではなかなかイメージできないことだからこそ、過去の教訓や他の地域の経験を知ることが大切なのです"



写真

東日本大震災から約1週間後の釜石市内
(CWS 五十嵐撮影)

けないと、なかなか共感が生まれず、自分事として気持ちに入ってきません。

「防災」を考える時に、インフラの整備や災害グッズの備蓄など、技術的・物理的な備えをイメージする方が多くいます。多くの自治体は、各種ハザードマップや避難所の地図やガイドラインなどを作成していますが、それらの内容をどれだけの住民が自分事として確認しているのでしょうか。道具があっても、使い方がわからなければ実際の役には立ちません。災害は自分の日常生活ではなかなかイメージできないことだからこそ、過去の教訓や他の地域の経験を知ることが大切なのです。まずは自分の生活範囲を超えた範囲の災害にも関心を持つことが、「防災」を実践する第一歩になるのではないのでしょうか。

(文：プログラム・マネージャー 五十嵐豪)

より深く大きなインパクトを生み出して いく—REGIONAL HUMANITARIAN PARTNERSHIP WEEK 2022を開催して

昨年末2022年12月9日から14日まで、Regional Humanitarian Partnership Week (RHPW) 2022を開催しました。このイベントはCWS Japanも理事を務めるADRRNとICVA、OCHAアジア太平洋事務所、CWSAとの共催によって毎年実施しているイベントで、今回は300名近くの人道支援関係者がタイのバンコクに集まりました。

アジア太平洋地域では、気候変動による気象リスクの増加、政情不安による紛争の激化、経済不況による貧困の悪化、人道支援スペースの縮小などたくさんの課題を抱えています。また、それらは毎年複雑化し続けています。今年のイベントでは、変化し続ける環境に対しわたしたちもどう変化していく必要があるのか、が焦点になりました。例えば、増え続ける気象災害に加え、各地で増加する人道ニーズにどう立ち向かうのか。紛争地の支援の手が届きにくい人々へ、どのように必要な支援を必要な時に届けられるのか、環境変化に対応していくために必要なパートナーシップとは何か、などが重点的なテーマでした。



写真

RHPWと同時開催したADRRN総会にて

©ADRRN

参加者はアジア各国に加え、ヨーロッパや米国などからも集まり、コロナ禍でオンライン開催せざるを得なかった鬱憤を晴らすようにたくさんの方々が積極的に参加してくれました。CWS Japanは上述したADRRNを代表してこのイベントの運営委員を務めています。2022年4月に準備を始め、8か月かかりましたが、無事開催できてホッとしています。RHPWはイベントをやるのが目的ではありません。

RHPWの場を通じ、より深く大きなインパクトを生み出していくパートナーシップ強化が目的です。最近着目されているコレクティブインパクトをまさに目指していく仲間づくりの場です。そのようなインパクトを生み出すための「場づくり」が目的であり、わたしたちが一生懸命に取り組む理由です。



写真

大小含め総数40セッションが開催されました（写真はGISの人道支援への活用方法をコーチングするセッションです）

©ADRRN

今年も年末にバンコクで同様のイベントを開催するべく、もうすでに議論を始めています。詳細は9月頃に公開いたします。

（文：事務局長 小美野剛）

過去のニュースレターやインタビュー記事は下記よりアクセス頂けます。

過去のニュースレターは[こちら](#)

インタビュー記事は[こちら](#)



上島 安裕 様 | 一般社団法人ピースボート...
© 7月 07, 2021 ■ パートナーの声



堀内 英様 | 特定非営利活動法人 国際協力...
© 7月 07, 2021 ■ パートナーの声



眞弓 幸之 様 | 国土防災技術株式会社事業...
© 6月 06, 2021 ■ パートナーの声



中村 清美 様 | 国土防災技術株式会社国際...
© 6月 06, 2021 ■ パートナーの声



Marvin Parvez | Reginal Director,
Community World Service Asia



金子信義 様 | (株)カネコ・アンド・アソシ
エイツ・ジャパン 代表取締役

いつもご購入いただき、ありがとうございます。
次回のニュースレターは2023年2月末の発行を予定しています。

特定非営利活動法人CWSJapan
〒169-0051
東京都新宿区西早稲田2-3-18
日本キリスト教会館25号室

メールアドレス:
public@cwsjapan.jp
電話:
03-6457-6840



[CWSJapan](#)



[@Japan_CWS](#)



[cws_japan](#)